



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより9月号2013

正教聖歌の伝統2

ビザンティン～ロシア～日本

●新シリーズ 10月から
「ロシアの伝統」を始めます

ロシア聖歌千年の歴史をひもときます。乞うご期待。



今月の予定

聖歌練習

名古屋 8日(代式後)、聖体礼儀後、

半田9/4日(水12:00)22日(日、代式後)主教祈禱の練習

名古屋指揮当番

1日エレナ廣石 15日マリア松島 22日エレナ廣石 29日ピーメン松島

奉神礼と聖歌を学ぶ会 10月6日開講

名古屋

先月号でお知らせしたように、「奉神礼と聖歌を学ぶ会」を月一度行い、講義と実習の両面から、聖歌の充実を図ってゆきたいと思えます。講義では、正教会礼拝における「聖歌」の役割、礼拝の流れや順番、教役者との調和などを中心に奉神礼(礼拝)としての聖歌の理解を深めます。実習では、譜面の見方、祈禱書の調べ方、息の合わせ方、音の合わせ方、指揮の見方、あわせて新しい指揮者の養成も行います。

第1回めは10月6日午後1時半から行います。講座はゲオルギイ神父による「奉神礼における聖歌の役割」と実習は「聖体礼儀の譜面のめぐりかた」です。聖歌隊席で歌われる方も、奉仕をしながら適宜歌われる方も、どなたもご参加下さい。半田教会のかたもご参加下さい。

半田

主教祈禱の練習を行います

9月4日(水)12時、9月22日(日、代式後)、
10月9日(水)12時、10月13日(日、代式後)

主教祈禱の楽譜は教会に用意してあります(茶色の表紙)。希望の方はマリア山本さん、または野畑執事長までお申し出下さい。

ユニゾン(一つ節)のススメ



先月前執事長で、長年聖歌隊でバス・パートを歌ってこられたニコライ近田さんが永眠されました。こよなく聖歌を愛した仲間へのお別れのプレゼントとして、お通夜のパニヒダの後、近田さんが大好きだったボルトニャンスキー「ヘルビム7番」とケドロフの「天にいます」を歌いました。ぴったりと息のあった合唱聖歌に、多くの方が感動したと話されました。

一方、この夜の「パニヒダ」の祈禱は、一切の飾りを廃した全くの単音(ユニゾン)で歌いました。30人近くが息を合わせて、一本の線で歌う単音のパニヒダは、「天国への凱旋歌」にふさわしい力強さがあり、古いロシアの聖堂を模した名古屋教会のドームによく似合っていました。

ところで日本の正教会では単音の時、「三度のハーモニーを付ける」ことが習慣になっています。実はこれは比較的新しい習慣で、17世紀頃から西洋音楽の影響を受けたウクライナやベラルーシなど南西ロシアで始まり、18世紀以後ロシアの西欧化によって広まったものです。三度のハーモニーは、響きのあう声で、互によく聞きあって調和して歌えば、繊細なハーモ

ニーを醸し出しますが、残念ながら多くの場合、自分のパートを守るのに必死で、「なんか違うなあ」と思いながらも最後まで微妙にはずれたまま歌われていることがしばしばあります。こうなると音のはずれているのばかりが気になり、歌う者も聴く者も、肝心の祈りに集中できなくなってしまいます。

正教会のより古い伝統はユニゾンです。名古屋ではズナメニイやビザンティンなどの古い聖歌も取り入れています。古い聖歌には西洋和声にもとづく三度のハーモニーよりも、全くのユニゾンか、つけるとしたらイゾン(通奏低音)を加える方がふさわしいでしょう。

三度も付けない、何の飾りもない、完全なユニゾンであっても合唱と同じ、あるいはそれ以上の集中力が求められます。「気楽に」歌うのではなく、ことばのリズムを合わせ、息を合わせ、祈りの心をついに、声を一つに歌います。

教会の聖歌は祈りです。祈りが一つになるとき、聖神の力が働いて、贈り物として、この上なく美しい祈りの体験が与えられます。

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ベレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

10・強弱：

アイコンが白黒でないように教会音楽にも色彩があります。ことさらに効果を加えるのではなく、動きのなかでリズムと音のラインによって醸し出される自然なニュアンスです。

教会音楽は無感情ではありませんが、見せかけの効果を作り出すために感覚を操ることはありません。私は、強弱は（単なる大きい小さい、導入、コントラスト、カデンツァなどのようにではなく）全体の動きの一部として扱いたいと思います。同様にテンポ（速度）も強弱の一種として考えたいと思います。

11. 正統性——正しい聖歌とは何か

聖歌の名称は「何が歌われるか（行われるか）」によって定義されているので、レーゲントは奉神礼上の機能に基づいて、祈祷文を音楽に翻訳することが求められます。

選曲するとき、奉神礼における用法どおり、正しく、作曲あるいは編曲されているかどうかをチェックしなければなりません。たとえば、チェスノコフの第1アンティフォン「我が霊」は、美しいアンセムとして書かれています。アンセムは西方の礼拝でアンティフォンに相当するものですが、厳密な意味でアンティフォンとは異なるものです。作曲者がアンセムとして

作曲したと考えると、正教会の祈りには不相当ということになります。アンセムは私たちの奉神礼の外にあるからです。またコンチェルトの場合も同じです。神品領聖を待つ時間にしばしば合唱コンチェルトが歌われますが、コンチェルトとはコンサートの意味ですから、コンサートで行われるべきもので、聖体礼儀の「領聖詞(キノイク)」の代わりに歌われるべきものではありません。領聖詞は、聖詠の句をリフレインとする歌で、奉神礼上特別の機能があります。指揮者はここを押さねばなりません。

逆の極端な例ですが、ある教区では「奉神礼に熱心な」指揮者が、領聖前のコンチェルトをすべて省いて、「何かを読む」ことにしてしまいました。これも間違いです。ここは領聖詞、リフレインを伴う特別の聖詠が歌われるべき箇所です。

※ 日本教会では神品領聖を待つ間、長さが適当なためか、イルモスがよく歌われます。しかしイルモスは旧約の民が、神の救いの約束を信じて祈る歌が多く、ハリストスによってすでにその約束が成就され、「神の国」の宴でその成就を分かち合う、私たち新約の民の感謝(ユーカリスト)の礼拝である聖体礼儀(ユーカリスト)、しかもクライマックスである領聖への待望感やその喜びの時にはなじまないもので、再考の余地があります。セルゲイ神父の言うように正教の古来よりの伝統が指示する「領聖詞」（主日では「天より主をほめあげよ！…」148聖詠）を歌うのが至当でしょう。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 「やってみよう」 八調で歌おう3

ことばを重視して音楽付けする その3 英語の場合

スラブ語(ロシア)

Госпо-ди по-ми -луй. Госпо-ди по-ми -луй.

英語1

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

英語 2

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

kievan chant, St. Vladimir Press

モロザン博士の2005年の講演会でも言及されたが、英語の聖歌も初期にはスラブ語聖歌のメロディに英語を当てはめた。英語で聖歌を歌うことが始まって半世紀たった20世紀後半、英語のリズムやイントネーションに配慮した音楽付けが推奨されるようになった。英語

の場合、Lórdとmércyにアクセントがあり、haveは軽く添えられる。リズムに書くと左ようになる。

1と2を比べると2の方が英語として自然なことがわかる。上記のセルゲイ神父もモロザン博士も英語らしい聖歌を求めて、苦労を重ねてきた。同じスラブ語聖歌を原型とする日本語聖歌も日本語の特性への配慮が望まれる。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料

監修:ゲオルギイ松島雄一 編集:マリア松島純子